

contents

大学生のHIV感染に対する意識と予防行動	1
北丸雄二のニューヨークレポート②③	10
「ありのままのわたしを生きる」ために②③	11

今月のブックガイド	12
JASEインフォメーション	13

大学生の HIV 感染に対する 意識と予防行動

目白大学人間学部心理カウンセリング学科教授 内山 絢子

はじめに

エイズ予防教育は、中学校や高等学校においては、保健体育の指導要領の中で、以下のような記載がなされている。

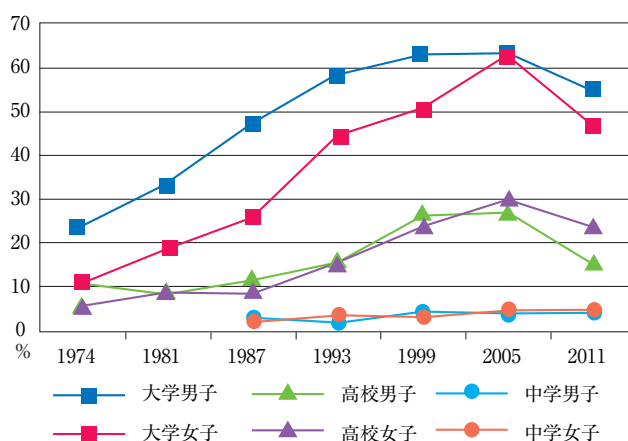
中学校；後天性免疫不全症候群（エイズ）及び性感染症については、引き続き取り上げることとした。
高等学校；新たな病原体の出現、感染症に対する社会の意識の変化等によって、エイズ、結核などの新興感染症や再興感染症の発生や流行が見られることを理解できるようにする。

内容はともかく中学や高等学校の中で、エイズに関する基本的な知識は教えられることになっている。

最近の性行動調査の中でも、HIV／エイズについては、中学生から大学生まで、次ページ表1に示すように学校で教えられることのトップに位置している¹⁾。

ところで、若者の性行動のうち、性交経験についてみると、高校生と大学生との間には比較的大きなギャップが存在する（図1）。高校生での性交経験は4～5人に1人であるのに対し、大学生は概ね2

図1 性交経験率の推移



人に1人程度と大幅に上昇する。高校生までは、5年後あるいは10年後には必要な知識かもしれないが、今の自分とは関係ないと傍観視すると思われる。しかし、大学生になれば、性交は身近な話題となる。いざその知識が必要なきには必ずしも正確な知識を有しているとは限らない。したがって最新の知識を提供し、注意を改めて喚起する意味で、大学生にこそ、HIV／エイズ感染予防教育は必要とされているのではないだろうか。

表1 学校で教えられた内容

	中学				高校				大学			
	男	%	女	%	男	%	女	%	男	%	女	%
70%以上	妊娠のしくみ	80.3	妊娠のしくみ	84.6	HIV/エイズ	87.5	妊娠のしくみ	87.5	HIV/エイズ	88.8	妊娠のしくみ	91.4
			男女の心の違い	70.0	妊娠のしくみ	82.9	HIV/エイズ	86.0	妊娠のしくみ	87.2	HIV/エイズ	91.2
					避妊の方法	74.2	避妊の方法	78.3	避妊の方法	80.5	避妊の方法	79.8
60%以上	HIV/エイズ	63.6	HIV/エイズ	64.6	性感染症	63.0	性感染症	64.9	セクハラ・性暴力	66.5	男女平等の問題	64.5
	男女の心の違い	62.3			男女平等の問題	61.0	人工妊娠中絶	60.7	男女平等の問題	66.0	性感染症	61.9
									性感染症	62.7		
50%以上									セックス	61.3		
					人工妊娠中絶	55.9	男女の心の違い	54.5	人工妊娠中絶	53.2	セクハラ・性暴力	59.7
					セックス	55.6	男女平等の問題	52.2			人工妊娠中絶	57.5
					自慰	54.2	セックス	51.5			セックス	56.3
					男女の心の違い	53.5						
40%以上					セクハラ・性暴力	50.7						
	自慰	46.6	セクハラ・性暴力	42.8			セクハラ・性暴力	48.9	自慰	49.5	男女の心の違い	42.7
	セクハラ・性暴力	44.6							男女の心の違い	48.2	性的マイノリティ	41.9
40%未満	恋愛	40.2							性的マイノリティ	41.7		
	男女平等の問題	36.8	恋愛	39.3	恋愛	33.7	自慰	29.9	性の不安や悩み	35.8	性の不安や悩み	34.5
	セックス	36.4	男女平等の問題	34.2	性の不安や悩み	29.0	恋愛	26.9	恋愛	31.0	恋愛	26.3
	性感染症	24.8	セックス	32.6	性的マイノリティ	19.2	性の不安や悩み	21.2			自慰	23.6
	性の不安や悩み	20.3	性感染症	24.5			性的マイノリティ	15.1				
	避妊の方法	20.2	自慰	24.4								
	人工妊娠中絶	15.4	避妊の方法	17.8								
	性的マイノリティ	7.1	性の不安や悩み	17.8								
			人工妊娠中絶	12.7								
			性的マイノリティ	5.3								

表2 男女別恋人の有無と性交経験（％は男・女・計それぞれの母数ごとの割合を示している）

男女	性交 経験 恋人の有無	実人員			%		
		性交経験なし	性交経験あり	計	性交経験なし	性交経験あり	計
男	恋人いない	23	3	26	24.5	3.2	27.7
	恋人いる	32	36	68	34.0	38.3	72.3
	計	55	39	94	58.5	41.5	100.0
女	恋人いない	69	7	76	39.0	4.0	42.9
	恋人いる	33	68	101	18.6	38.4	57.1
	計	102	75	177	57.6	42.4	100.0
計	恋人いない	92	10	102	33.9	3.7	37.6
	恋人いる	65	104	169	24.0	38.4	62.4
	計	157	114	271	57.9	42.1	100

今回、大学生を対象に、HIV／エイズ感染についての知識と予防行動についての調査を実施したので、紹介する。

【調査方法】

首都圏の大学生 271 名を調査対象者として、2011 年 7 月から 9 月の間に大学の授業時に実施した。調査内容は、以下のとおりである。

- 1) HIV／エイズ感染についての知識
- 2) エイズ予防行動
- 3) HIV 感染者に対する差別観
- 4) デートバイオレンスに対する許容度
- 5) 自尊感情
- 6) 将来展望

7) シティズンシップ（社会人としての責任の自覚）
4)～7) までは、HIV 感染とは直接関係があるか否かは明らかではないが、大学生の性交経験のある者の特性を把握するための背景要因を調査する項目である。

【調査対象者の属性】

年齢は 18 歳から 25 歳まで分布しているが、19 歳・20 歳が約半数を占める。男性：94 名（34.7%）、女性：177 名（65.3%）で、女性が多い。性交経験と恋人の有無のクロス集計を表 2 に示す。

恋人のいる者は全体の 62.4%、男子のほう（72.3%）が女子（57.1%）よりも恋人のいる者が多い。性交経験のある者は、全体で 42.1%で、男子：41.5%、

表 3 HIV 感染に関する知識

	質問項目	略称	回答
予防	コンドームを正しく使えば、HIV の感染は防げる	コンドームで予防	正
	ピルを飲めば HIV 感染は予防できる	ピルで予防	誤
検査	HIV に感染しているかどうかは検査が必要である	検査が必要	正
	HIV 検査は保健所で無料である	保健所で無料	正
感染	検査結果が陰性ならばエイズには感染していない	検査が陰性	誤
	他の感染症に感染しているとエイズにもかかりやすい	感染症に感染	正
	クラミジアに感染していれば、HIV に感染する危険率は上昇する	クラミジア感染	正
	HIV に感染しているがウィルス量は検出限界なので他人にうつすことはない	他人への感染	誤
	不特定多数の人とのセックスが危険なのであり、特定の恋人とのみセックスするのであれば、HIV 感染の危険性はない	特定の恋人とのセックス	誤
母子感染	HIV は母子感染するので、妊婦の HIV 感染が明らかになった場合は中絶すべきである	母子感染	誤
	HIV に感染したら子供は産めない	子供は産めない	誤
	HIV は母乳にも存在するので、感染者は母乳保育をすべきではない	母乳保育	正
病状と治療	HIV に感染しているかどうかは自覚症状から判断できる	自覚症状	誤
	HIV 感染者の治療薬代は保険を使わないと月当たりの経費は	月当たりの経費	15 万円
	HIV 感染が明らかとなったときは、すぐ服薬治療を始めるべきである	服薬治療の開始	誤
	HIV に感染すると 10 年以内に死亡する	10 年以内の死亡	誤
日本と世界の現状	現在の日本での HIV 感染経路第 1 位は	HIV 感染経路 1 位	同性間接触
	日本は先進国の中で、新規感染者の増加している数少ない国の一つである	日本は増加	正
	世界中で HIV 感染者は	世界の感染者	4000 万
	タイでは売春婦から男性への感染が主たる感染ルートである	タイでの感染ルート	誤

女子：42.4%で、男女で大きくは変わらない。恋人がいて性交経験のある者は男女とも 38% 程度である。恋人がいるが性交経験がない者は、男子で 34%、女子で 18.6% である。恋人の有無が必ずしも性交に直接結びつくとは限らない様子がみられる。

また、恋人はいないが性交経験のある者は 3～4% 程度である。恋人もいず、性交経験のない者は、男子：24.5%、女子：39.0% で、女子にやや多い。以下の分析は、主として性交経験の有無別を中心に行う。

I HIV 感染についての知識と予防行動

1) 大学生の HIV 感染に関する知識

初歩的な質問から、やや専門的な質問まで 20 問についての知識を尋ねた（表 3）。回答法は、主として正誤法の 3 件法（正しい・まちがい・わからない）により、また、医療費や感染者数については 3 種類の数値の中から正解を 1 つ選択するよう求めた。^{4) 5)}

結果は、表 4 に示すとおりである。正解の割合が高いのは、「感染の確認には検査が必要」（94.4%）、「特定の恋人とのセックスは安全とは限らない」（83.6%）、「HIV 感染でも子供は産める」（75.0%）、「ピルでは予防できない」（75.0%）、「検査は保健所で無料である」（72.0%）、「コンドームで予防可能」（71.3%）

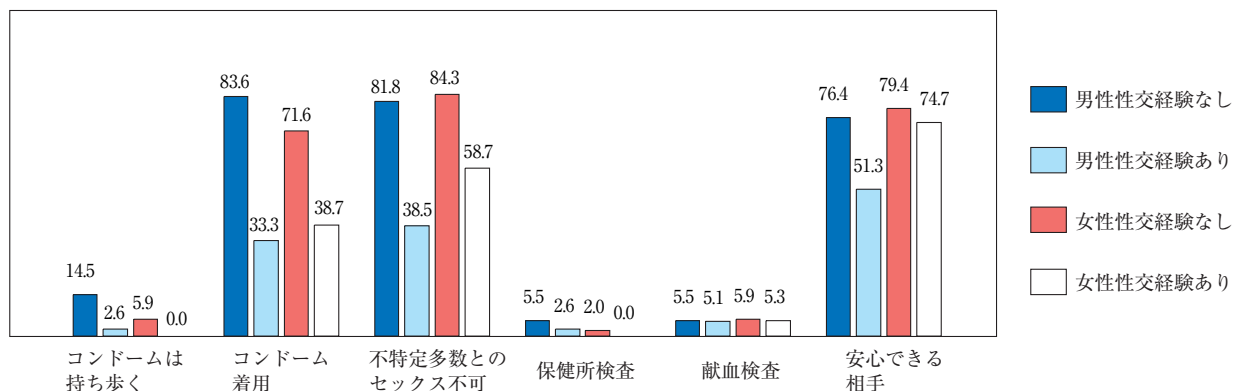
表 4 男女別性交経験の有無別正解率（%）

	男女別性交経験の有無				
	男		女		全体
	なし	あり	なし	あり	
検査が必要	88.7	87.2	100.0	94.7	94.4
特定の恋人とのセックス	81.1	79.5	88.1	81.3	83.6
子供は産めない	71.7	61.5	80.2	77.3	75.0
ピルで予防	77.4	76.9	78.2	68.0	75.0
保健所で無料	67.9	66.7	78.2	69.3	72.0
コンドームで予防	67.9	74.4	71.3	72.0	71.3
自覚症状	66.0	71.8	73.3	58.7	67.5
10 年以内の死亡	52.8	74.4	65.3	58.7	62.3
他人への感染	52.8	59.0	64.4	46.7	56.3
世界の感染者	37.7	66.7	51.5	48.0	50.0
日本は増加	49.1	53.8	47.5	41.3	47.0
母乳保育	34.0	33.3	50.5	44.0	42.9
母子感染	45.3	46.2	42.6	36.0	41.8
月当たりの経費	39.6	41.0	37.6	30.7	36.6
クラミジア感染	34.0	41.0	42.6	24.0	35.4
検査が陰性	37.7	38.5	35.6	28.0	34.3
HIV 感染経路 1 位	32.1	25.6	34.7	32.0	32.1
感染症に感染	18.9	35.9	22.8	17.3	22.4
服薬治療の開始	17.0	10.3	7.9	8.0	10.1
タイでの感染ルート	15.1	5.1	5.9	2.7	6.7

等は 7 割以上の者が正しい解答をしている。

一方、「世界中の HIV 感染者数」（50.0%）や「日本の感染者は増加」（47.0%）、については半数程度の正解率に留まっている。特に、HIV 感染経路 1 位が同性間性的接触（32.1%）であることや、検査にはウィンドウ期が存在する「検査が陰性であれば感染していない」（34.3%）、「感染症に感染していれば感染率が上昇」（22.4%）、「クラミジア感染していれば

図2 性交経験の有無別予防行動の実践 (%)



感染しやすい」(35.4%)等の質問への正解率は3割台に過ぎない。男女別にみると、母子感染関連質問は女子のほうがやや正解率が高い。

問題だと思われるのは、性交経験率の有無別に見た結果である。当然、性交経験者は、未経験の者よりも正解率が高いことが期待される。しかしながら、性交経験の有無別に正解率を比較してみると、さほど大きな差とは言えないが、概ね、性交経験のない者のほうが、正解率が高い。正確な知識がないから、安易に性交をしてしまうのであろうか。

男子の場合には、コンドームで予防、自覚症状など予防に直結するであろう知識や世界情勢についてなど約半数の項目については、経験者のほうが、正解率が高い。一方女子は、ほとんどすべての項目で、経験者のほうが正解率が低く、正確な知識をもたないまま、性交に至っている様子が見て取れる。現実の性交場面を想定しても、女子のほうから誘うよりは、誘われる場合が多いことを考えると、女子に重点的に知識についてしっかり教える必要があるだろう。特に、コンドームの着用等具体的な場面において、着用しなければ妊娠や性感染症の危険など、後に影響が大きいのは、女子のほうなので、男子任せではなく、女子が主体性を持って行動する必要があるだろう。

2) 予防行動

感染予防行動としては、次の6項目について尋ねている。

- 1) 常にコンドームは持ち歩いている
- 2) セックスをするときは必ずコンドームを着用する
- 3) セックスは不特定多数の人とはしないようにしている
- 4) 保健所による HIV 感染検査を受けている

5) 献血による HIV 感染検査を受けている

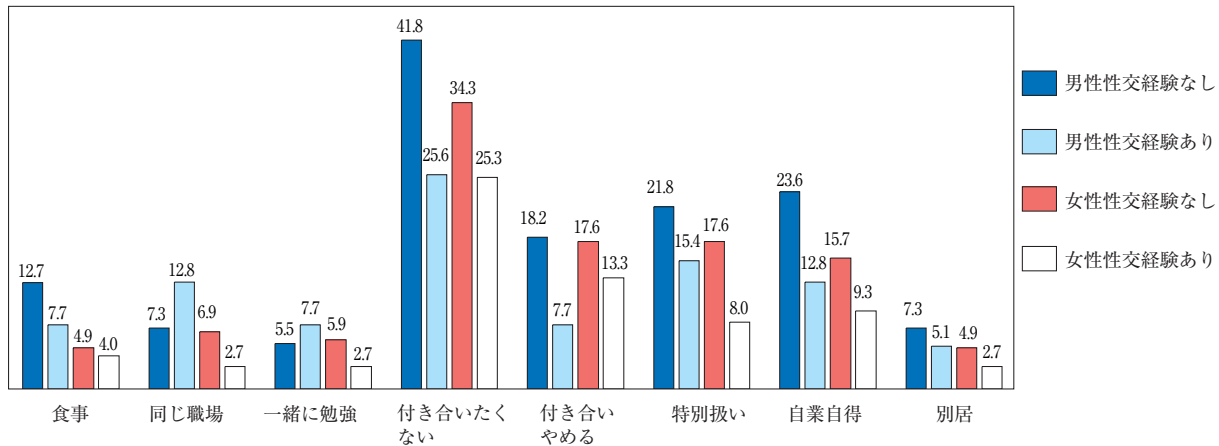
6) 本当に安心できる相手としかセックスをしない

回答者全体の割合^{*}で、一番高かった項目は、「安心できる相手としかセックスをしない」(73.4%)、次いで、「セックスは不特定多数の人とはしないようにしている」(70.1%)で、いずれも行動のレベルの予防というよりは、意識面での努力といえよう。行動レベルの、「セックスをするときは必ずコンドームを着用する」(59.4%)は6割程度である。避妊や感染予防を考慮するならば、現実的には100%実行してほしい内容である。また、「常にコンドームは持ち歩いている」(5.5%)や検査を受けている者(「献血による HIV 感染検査を受けている」: 5.5%、「保健所による HIV 感染検査を受けている」: 2.2%)はきわめて少ない。また、性交相手の選択は、女子のほうが一層慎重であるが、性交時のコンドーム着用は男子のほうが多い。

性交経験の有無別に、予防行動についてみたのが、図2である。いずれの行動においても、性交経験のある者は、ない者に比べ、予防行動をとる割合が低いことが示されている。特に、コンドーム使用などの現実的に役立つ行動については、性交経験のある者の予防行動選択の割合が著しく低くなる。女子の場合、予防行動をとらなければならないことはわかっていると思うが、実際に性行動の実践時には、実行しにくいということであろうか。このこと自体が新たな問題を提起しているように思われる。

性交未経験者については、当然実践場面はない。したがって、意識レベルのみの予防行動となる。頭の中で考えている時はできるつもりでも、実際の行動場面では実践することは難しいことを示していると考えられる。

図3 男女別性交経験の有無別差別意識 (%)



3) HIV 感染者に対する差別意識

HIV 感染者に対する差別意識があるか否かを下記の7項目について調べた。

1. いっしょに食事をしたくない
2. 同じ職場で働くのは嫌だ
3. HIV に感染している人がいる教室で勉強するのは嫌だ
4. 付き合いたくない
5. 付き合うのをやめる
6. 特別扱いをする
7. 自業自得だと思う
8. 家族が HIV に感染したら別居する

男女別性交経験有無別の結果は図3に示すとおりである。大多数の者が感じるような特に強い差別意識があるとは言えない。しかしながら、回答者全体**でみると、約3分の1の者は、付き合いたくないと回答している。また、15%程度の者は、特別扱いしたり、付き合いをやめたり、自業自得だと思ったりする。しかしながら、一緒に勉強したり、働いたり、食事をしたりすることに抵抗感のある者はわずかである。男女別にみると、やや男子のほうが、また性交経験の有無別にみると、性交経験のない者に差別意識が若干高い。

II 性交経験に影響を及ぼす要因

1) 自尊感情

自尊感情は、自分が世の中でかけがえのない存在であることを自覚し、自分自身に価値を見出すと同時に、他者も同じようにかけがえのない存在であることに気づき、他者をも尊重することをいう。自尊感情が高ければ、無謀な性交をすることはないし、

表5 自尊感情（肯定割合、*逆転項目については否定割合）

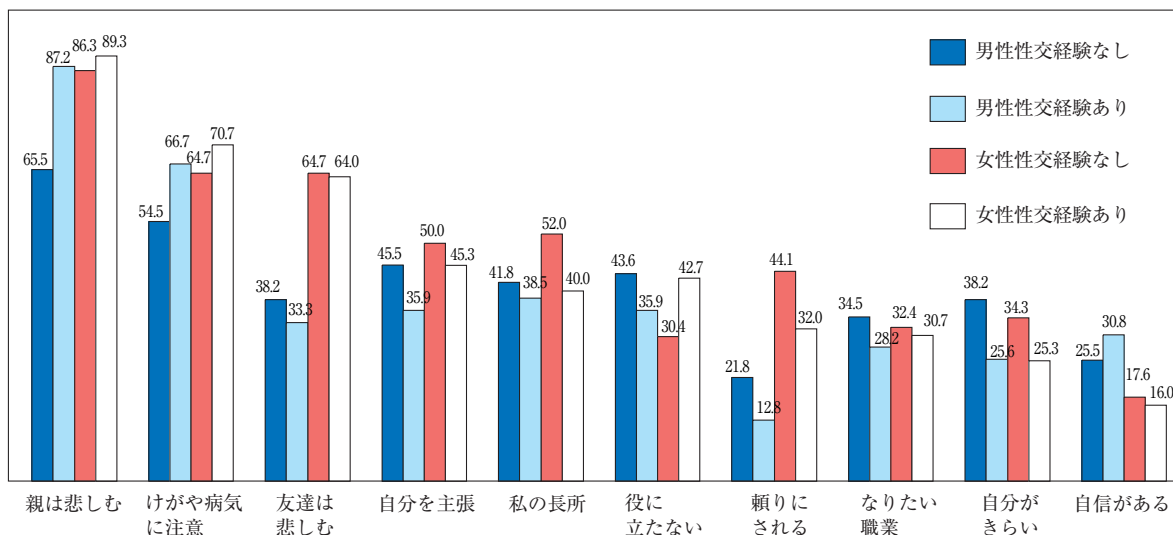
	男女別性交経験の有無（％）				合計
	男		女		
	なし	あり	なし	あり	
私は人から頼りにされている	21.8	12.8	44.1	32.0	31.7
けがや病気をしないよう注意している	54.5	66.7	64.7	70.7	64.6
自分がきらいである*	38.2	25.6	34.3	25.3	31.4
自信がある	25.5	30.8	17.6	16.0	20.7
周りの人と意見が違っても、自分が正しいと思うことを主張できる	45.5	35.9	50.0	45.3	45.8
自分になりたい職業につけると思う	34.5	28.2	32.4	30.7	31.7
私は役に立たない人間だと思う*	43.6	35.9	30.4	42.7	37.3
私には、他の人にはない、良いところがある	41.8	38.5	52.0	40.0	44.6
私が死んだら、学校の友達は悲しむと思う	38.2	33.3	64.7	64.0	54.6
私が死んだら、親（または親に代わる人）は悲しむと思う	65.5	87.2	86.3	89.3	83.0

性感染症予防にも配慮がなされ则认为られる。

自尊感情については、表5に示す内容について尋ねた⁵⁾。全体として、自尊感情はあまり高いとは言えない。肯定する割合が50%を超えているのは、「死んだら親や友人は悲しむ」、「病気やけがに注意」の3項目のみである。他の人と意見が異なっても「自己主張できる」、人にはない「長所がある」が40%台、「役に立つ」、「頼りにされる」、「になりたい職業につける」、「自分が嫌いではない」などが30%台、「自信がある」は20%台である。

項目により多少の差異は見られるものの、概して女子のほうが自尊感情が高い。また性交経験のない者のほうが概ね肯定割合が高い。しかし、HIV 感染と直接関係するような項目（けがや病気に注意）に関しては、性交経験ありのほうが高い（図4）。

図4 男女別性交経験有無別自尊感情 (%)



2) 伝統的性役割観と性暴力の容認

男女雇用機会均等法等の施行により、社会でのさまざまな領域で女性が活躍できる場が広がってはきているものの、一部には根強い男女不平等感も残存するとの指摘もある。ここでは、伝統的な性別役割意識と性暴力への容認傾向を尋ねている。伝統的な性役割観を肯定する者は、性交が行われる場面にあっても、男性が支配的な役割を持つと考えられ、女性のリーダーシップに対して否定的になると考えられ、同時に、性暴力に対してもあまり配慮がなされないと考えられる。

男女平等感については、表6に示すような伝統的な男女別役割分業を示す内容について賛成か反対かを尋ねている。全体としては、どちらともいえないという回答が最も多い。これらの内容を肯定する割合は20%以下と少ない。伝統的な性役割観を肯定する割合を男女別にみると、女子のほうが、伝統的な性役割観を肯定する割合が高い。また、性交経験の有無別にみると、性交経験のない者のほうが伝統的な性役割観を肯定する割合が高い。しかし、男女別性交経験の有無別にみると、男女で傾向が異なり、男子の場合は、性交経験のある者のほうが伝統的な性役割観を肯定する傾向がみられる。女子ではこの傾向が逆転し、性交経験のない者のほうが、伝統的な性役割観を肯定する割合が高い。

デートバイオレンスといわれる親しい者の間でおこるさまざまな暴力的な行為に対する容認についても尋ねた。これらの行為に対する容認傾向は、総じて高くはない。しかし、男女により大きく異なる内

表6 男女平等感（肯定割合、*逆転項目については否定割合）

	男女別性交経験の有無（％）				合計
	男		女		
	なし	あり	なし	あり	
「男は仕事、女は家庭」という考え方は正しいと思う	10.9	15.4	16.7	10.7	13.7
子育ては母親の仕事だと思う	18.2	12.8	26.5	18.7	20.7
家事は女性の仕事だと思う	10.9	15.4	19.6	14.7	15.9
夫婦が別の姓を名乗っても良いと思う＊	34.5	30.8	23.5	25.3	27.3
男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てるほうがよい	34.5	38.5	21.6	22.7	26.9

容がある。例えば、キスやセックスの強要など直接的な性行動に関しては、男女で大きく容認傾向が異なり、男子のほうが許容的である。一方、直接的な身体的な暴力（殴る・蹴る）、メールに関連する内容（メールのチェック・アドレスの消去等）に関しては大きな差異は見られない。また、性交経験の有無別にみると、すべての内容について、性交経験なしの者のほうが容認傾向が高い（表7）。

3) 将来展望

ここでは、目標意識尺度（都築、1996）を用いて将来目標等について尋ねた。結果は表8に示すとおりである。性交経験の有無別に見た結果においては、両群間に顕著な差異は少なく、10ポイント以上の差異が見られたのは、「問題を自分で解決」、「生きる目標」、「将来計画を持ちたい」の3項目のみで、いずれも性交経験なし群のほうがこれらの内容を肯定する割合が高かった。

表7 デートバイオレンスに対する容認 (%)

カテゴリー		男女別性交経験の有無				合計
		男		女		
		なし	あり	なし	あり	
行動の拘束	いつでも誰と居るのかを確認する	27.3	17.9	29.4	12.0	22.5
	好みの髪型や服装を強要する	12.7	12.8	12.7	6.7	11.1
	バイトを辞めさせる	0.0	5.1	5.9	2.7	3.7
	昼夜を問わず、いきなり家に来る	14.5	10.3	12.7	2.7	10.0
性行動	キスを強要する	50.9	25.6	32.4	10.7	29.2
	無理やり身体を触る	38.2	7.7	16.7	2.7	15.9
	一度セックスをしたら、自分のもの考える	32.7	12.8	9.8	2.7	12.9
	セックスを強要する	30.9	15.4	7.8	1.3	11.8
	避妊なしの性行為をする	12.7	7.7	7.8	1.3	7.0
	性感染症をうつす	3.6	10.3	2.0	1.3	3.3
携帯・メール	毎日、メールすることを強要する	34.5	10.3	33.3	16.0	25.5
	携帯履歴やメールをチェックする	12.7	7.7	10.8	4.0	8.9
	相手の携帯に入っている異性のアドレスを消去する	7.3	5.1	3.9	2.7	4.4
身体暴力	髪をひっぱる	9.1	10.3	3.9	2.7	5.5
	殴る・蹴るなどの暴力をふるう	9.1	7.7	2.0	2.7	4.4
実人員（名）		55	39	102	75	271

男女別で性交経験の有無を比較すると、女子では顕著な差異が見られたのは、「計画してから活動」、「将来のことは考えない」の2項目のみで、いずれも性交経験ありの者のほうが肯定する割合が高く内容的には矛盾のある回答となっている。男子では、両群に10ポイント以上差異のある項目が見られた。性交経験ありの者が高いのは、「締め切りの日にならないと始められない」、「時間ぎりぎりにならないと始められない」、「物事ははずみで決定する」など時間や管理がよくできていない様子がみられる。一方、性交経験のない者に多い項目は、「将来のことはあまり考えない」、「将来目標が実現できないかと思う」、「将来が不安だ」、「将来のことはあまり考えない」、「自分の将来の見通しがほしい」など将来に対する不安、もしくは将来を決定できない苛立ちのようなものが顕著である。

男女別にみると、「将来への不安」、「問題を自分で解決できる」、「将来に夢」、「時間ぎりぎりまで始められない」、「自分の将来の見通しがほしい」、「計画的に行動できる」、「将来計画を持ちたい」の項目で、

表8 目標意識と性交経験の有無 (肯定割合、%)

	男女別性交経験の有無				
	男		女		全体
	なし	あり	なし	あり	
将来に希望がない	65.5	59.0	67.6	65.3	65.3
目標を実現できない	58.2	48.7	57.8	57.3	56.5
人生が悪い方へ	40.0	33.3	37.3	37.3	37.3
将来が不安	63.6	53.8	66.7	74.7	66.4
将来に不安感	63.6	61.5	61.8	72.0	64.9
自分で切り開く	38.2	38.5	33.3	28.0	33.6
困難でもうまくやる	32.7	23.1	32.4	28.0	29.9
毎日がむなしい	38.2	41.0	38.2	30.7	36.5
将来に希望	23.6	33.3	30.4	36.0	31.0
問題を自分で解決	45.5	33.3	53.9	44.0	46.5
重要な価値が実現	29.1	25.6	25.5	22.7	25.5
管理して時間配分	16.4	17.9	16.7	13.3	15.9
計画してから活動	25.5	15.4	25.5	37.3	27.3
時間を効果的に使う	20.0	20.5	29.4	22.7	24.4
すばやく物事を進める	18.2	12.8	24.5	22.7	21.0
日々の活動管理	14.5	17.9	25.5	21.3	21.0
将来の目標あり	49.1	56.4	56.9	48.0	52.8
将来に夢	52.7	48.7	59.8	58.7	56.5
生きる目標	56.4	46.2	58.8	48.0	53.5
将来計画	43.6	43.6	52.9	34.7	44.6
目標を持って生活	36.4	38.5	47.1	36.0	40.6
将来のことは考えない	40.0	20.5	20.6	30.7	27.3
締め切りの日に始める	43.6	53.8	60.8	56.0	55.0
時間ぎりぎり	50.9	61.5	69.6	60.0	62.0
いつまでもやらない	40.0	46.2	58.8	46.7	49.8
物事ははずみ	45.5	56.4	50.0	41.3	47.6
成り行き任せ	49.1	53.8	44.1	46.7	47.2
自分の将来の見通し	63.6	53.8	73.5	73.3	68.6
計画的に行動	60.0	61.5	82.4	81.3	74.5
将来計画を持ちたい	52.7	48.7	78.4	66.7	65.7
将来を考えるのは大切	76.4	76.9	85.3	84.0	81.9
実人員	55	39	102	75	271

女子のほうが10ポイント以上高くなっており、期待と不安がないまぜになっている様子がうかがえる。いずれにせよ、将来の見通しについては、男女で多少異なった展望を抱えていることが示唆されている。

4) シティズンシップ (市民意識)

北欧を中心に、若者が、自分たちが住みやすい健全な社会を構築・運営していく能力のようなものをシティズンシップ (citizenship) と呼び、それらを大人社会の人々が育てたり、援助しようとしたりする傾向がみられる。今回、このような、社会人としての自覚や責任について30項目を作成し、シティズンシップ意識として、表9に示すような内容について尋ねてみた。性交経験の有無や男女別で10ポイント以上の顕著な差異が見られたのは、結婚出産願望の項目であった。性交経験なし群が、結婚願望・出産願望ともに高いことが示されている。

表9 シティズンシップ尺度【性交経験の有無別】(%)

	男女別性交経験の有無				
	男		女		合計
	なし	あり	なし	あり	
就職してはじめて、社会と接点ができる	27.3	25.6	30.4	25.3	27.7
就職は自分のためばかりでなく、社会貢献につながる	52.7	59.0	72.5	72.0	66.4
税金を払うことによって、一般の人が生活しやすいように国の設備が整備される	38.2	43.6	52.9	52.0	48.3
老後の生活を豊かにできるなら、税金は高くても構わない	36.4	33.3	37.3	32.0	35.1
20歳になったら、選挙の際に必ず投票に行く	40.0	38.5	46.1	58.7	47.2
選挙での自分の1票は、社会を変える1票である	29.1	33.3	41.2	36.0	36.2
義務を果たしてから、権利を主張すべきだ	60.0	76.9	72.5	73.3	70.8
20歳をすぎても精神的に未熟な者が多い	76.4	82.1	88.2	86.7	84.5
学校では教養を教えるだけで十分だ	23.6	23.1	11.8	6.7	14.4
大学ではもっと専門性に直結した教育をすべきである	58.2	51.3	47.1	41.3	48.3
学校では生活に役立つ知識を教育として教えるべきだ	65.5	64.1	53.9	61.3	59.8
今の学校教育は若者の要求にあった教育内容がなされていない	41.8	30.8	34.3	29.3	33.9
原発に反対なら、反対運動として行動すべきだ	45.5	41.0	30.4	33.3	35.8
社会を変えるためには、まず自分が行動することだ	63.6	53.8	63.7	56.0	60.1
社会の中で、自分たちは果たすべき役割を持っている	47.3	48.7	56.9	44.0	50.2
社会の仕組みについて、議論をしようことは良いことだ	72.7	69.2	73.5	74.7	73.1
社会格差が広がっていると思う	65.5	59.0	64.7	66.7	64.6
社会格差は是正されるべきだ	54.5	53.8	48.0	52.0	51.3
自分は社会差別されていると感じる	18.2	23.1	15.7	10.7	15.9
社会の一員としての自覚がある	40.0	38.5	30.4	36.0	35.1
不況で若者の就職の門戸が狭くなっている	70.9	71.8	80.4	78.7	76.8
若者の要求にあった就職先がない	52.7	38.5	54.9	60.0	53.5
今の若者には、未来社会を担うという意識が欠落している	60.0	59.0	63.7	54.7	59.8
社会の出来事や事件にはあまり関心がない	30.9	25.6	22.5	20.0	24.0
悩みを気軽に相談できる公共の機関を利用している	12.7	5.1	8.8	6.7	8.5
自分たちには社会を変える力がある	36.4	33.3	37.3	28.0	33.9
社会は変える必要がある	67.3	51.3	62.7	61.3	61.6
自分は進んで税金を払いたい	34.5	20.5	30.4	22.7	27.7
早く結婚したいと考えている	38.2	28.2	52.9	37.3	42.1
自分は子供が欲しい	58.2	53.8	68.6	50.7	59.4

表10 抽出された因子

自尊感情	自分への信頼因子
	自己主張因子
ジェンダー観	伝統的性役割因子
デートバイオレンス	自由の拘束因子
	性と暴力因子
将来展望	将来への不安因子
	将来への期待因子
	計画性因子
シティズンシップ	日常生活管理因子
	税金による社会貢献因子
	社会的成熟因子
	若者への門戸制限因子
	結婚出産願望因子

III 因子分析結果

30項目それぞれの内容についてみてきたが、性交経験の有無別、男女別で一貫した結果は見いだせていない。

因子分析の手法を使うことにより、変数を少なくして、抽象化した場合には、もう少しわかりやすい結果が示されるのだろうか。ここでは、自尊感情・伝統的性役割観、デートバイオレンス容認度・目標尺度・シティズンシップについて、回答結果を因子分析した。その結果、表10に示すような因子が抽出された。ここでは、男女別、性交経験の有無、予防行動の選択の高低により、差異がみられるか否かを検定した。

抽出された因子について、性交経験の有無・男女・予防行動の選択の有無別に因子得点の平均値を比較したのが表11である。

さまざまな側面から、HIV感染予防についての諸特性について分析したが、明確な回答が得られてはいない。従来、知識を教育することにより、予防ができると考えられてきたが、むしろ、性行動の場合、知識があったからといって予防行動に結びつくわけではない。今後、新たな方策を考える必要があるであろう。

まとめ

日本でHIV感染者が初めて発見されたころ、性行動の低年齢化が叫ばれたことから、中学生や高校生を対象者として、予防教育が行われてきた。しかし、中学校や高等学校で一度教えておけば、その効果は継続すると考えているのか、大学においては、性教育はほとんど実践されていないのではなかろう

表 11 因子分析結果との関連（男女・性交経験・予防行動）

*** P<0.001 * P<0.05（それぞれ1%水準、5%水準で有意）

		男女別				性交経験別				予防行動高低別 (性交経験ありのみ)			
		男	女	有意確率		なし	あり	有意確率		低	高	有意確率	
		平均値				平均値				平均値			
自尊感情	自分への信頼因子	0.109	-0.065	0.737		0.009	-0.013	0.665		0.027	-0.099	0.638	
	自己主張因子	-0.120	0.074	0.063		0.024	-0.035	0.356		-0.024	-0.075	0.580	
ジェンダー	自由の拘束因子	0.364	-0.177	0.306		0.215	-0.311	0.000	***	-0.282	-0.414	0.556	
	性と暴力因子	0.445	-0.242	0.000	***	0.069	-0.099	0.289		0.150	-0.372	0.001	***
将来展望	将来への不安因子	-0.040	0.037	0.340		-0.024	0.035	0.282		-0.048	0.155	0.466	
	将来への期待因子	-0.005	-0.020	0.696		0.064	-0.092	0.419		-0.200	-0.049	0.134	
	計画性因子	0.039	-0.001	0.250		0.046	-0.066	0.452		-0.041	-0.164	0.460	
	日常生活管理因子	-0.086	0.032	0.054		0.012	-0.017	0.611		-0.042	-0.124	0.304	
シティズンシップ	税金による社会貢献因子	-0.171	0.121	0.108		-0.019	0.028	0.032	*	-0.080	0.325	0.899	
	社会での役割因子	0.097	-0.023	0.900		-0.008	0.012	0.518		-0.011	-0.036	0.910	
	社会への関心因子	0.235	-0.132	0.032	*	0.012	-0.018	0.813		0.242	-0.264	0.027	*
	若者への門戸制限因子	-0.042	0.041	0.145		-0.044	0.065	0.386		-0.025	0.407	0.293	
	結婚出産願望因子	-0.152	0.116	0.767		0.099	-0.147	0.114		-0.302	0.121	0.594	
知識	HIV についての正しい知識	10.021	10.254	0.027	*	9.983	9.812	0.051		9.491	10.180	0.215	

か。大学生は、中学生や高校生と比べれば、はるかに性交の割合が高くなるのに、予防教育の実践についてはあまり考慮されることがなかった。覚えたとしても、忘却はいつでも起こるし、特に、性行動に関しては、知識を持っていることが必ずしも実践で応用できるということにはならない。大学生に今一度 HIV / エイズ感染予防教育が行われてもよいのではなかろうか。今回の調査においても、性交経験の有無別に見た結果、男女で傾向が異なり、男子については、性交経験がある者のほうが知識が高い項目もあり、特に予防活動に関する内容については、性交経験ありの者のほうが高い正解率を示していた。しかし、女子については、性交経験のある者のほうがほとんどの項目で、正解率が低かった。女子に対して、改めて、知識としての予防教育を働きかける必要がある。

しかし、たとえ知識があったとしても、実践場でできちんと予防行動がとれているかという点必ずしもそうとは言えない。意識面としての予防行動（不特定の人と性交を避けるなど）では、女子の場合性交経験のある者においても警戒的な態度がやや見て取れるが、それでも性交経験のない者と比べると、その割合はやや低めである。

さらに、性行動実践時に予防行動がとれている（コンドーム着用）のは、男女とも、性交経験ありの者のほうが低く、男女とも性交経験ありの者が、実践時には予防行動がとれていないことが示された。

それでは、性交経験がある者の特徴をどのような

側面から明らかにできるのだろうか。ここでは、自尊感情・デートバイオレンス（性暴力）に対する許容度・市民意識について尋ねた。性交経験のある者は、自尊感情が低め、デートバイオレンスに対して許容的等の傾向はみられるものの、常に一貫しているというわけではなかった。一時期、性交経験のある者は、生活態度や価値観に偏りがみられることが指摘されたこともあった。しかしながら、不況などの経済状況、大学卒業者の非正規雇用の増加・就職難などの社会的状況も大学生の生活態度に影響を及ぼしていると考えられる。実際、今回調査でも、女子の結婚願望が比較的高いことが示されている。また、このことは、性交経験を促進する要因が多様化しているとも考えられる。今回の調査においては、結婚出産願望は、むしろ性交経験のない者のほうであった。少子化・晩婚化が指摘されて久しい今日、今後、長期的な展望のもとに、性行動をどのように位置づけていくかを改めて若者に問うてみたい。

【注】

- 1) 2) 日本性教育協会 青少年の性行動 わが国の中学生・高校生・大学生に関する第7回調査 2012
- 3) 内山広美 HIV 感染移管する知識獲得に及ぼす諸要因の研究 2012 目白大学大学院現代心理専攻 修士論文
本報告は同論文を再分析したもので、一部、論文の結果を引用している。
- 4) 宇野賀津子 あなたと隣の HIV ルイ・パストゥール医学研究センター研究報告 2008 を参考にした。正解の解説等については、同論文に詳細な説明がなされているので参照されたい。
- 5) 宇野賀津子 HIV / AIDS の現況と教育の試み 現代性教育研究 26-4 7-9 2008
- 6) 総務庁青少年対策本部 現代青少年の発達課題に関する研究 平成7年この調査で使用された自尊感情尺度を用いた。今回結果は、一般中学生の結果と大きくは変わらない。
- 7) 宮本みち子 スウェーデンのシティズンシップ教育 1～6 明るい選挙推進協会「私たちの広場」306～311 2009～2010

アメリカの性教育
— その1 —

アメリカの十代の青少年のほとんどは中等学校（日本の中学から高校までに相当）で少なくとも一度は性教育を受けます。第一次性徴の始まる小学校高学年でも先生がなんらかの話題で性を教えることが多いようです。しかし州によって何を教えるかは違うし、あるいはそれは家庭が決めることで学校はノータッチという選択もあります。教える場合も、その内容は州ではなく市や町の学区に任せているところもあります。

実際の性教育で扱う話題は、たとえば、思春期とは何か、から始まって HIV / エイズや性感染症、性交の自制、十代の妊娠問題、そしてピアプレッシャー（同調圧力）への対応法と進みます。自立半ばの十代にとって同調圧力はとても大きく、性体験の自慢話が蔓延しがちな十代の会話の中で性体験のない自分に劣等感や焦りを感じないで済むよう、それでも自分は自分なのだという自信をもたせることが必要なのです。

さらに踏み込めば避妊法や感染症の予防法、性的指向、性的虐待、そして妊娠中絶の実際とその倫理性に関しても様々な具体例とともに話し合うところもあります。そういう教育はニューヨークなどの大都市圏の学校に多いのですが、キリスト教系の私立学校では教えなかったりしますし、保守的な中西部や南部の学区ではセックスの話題さえはばかれるところも多い。この国がもともとピューリタンが建国したものだという伝統が各地にとっても根深く残っているのです。

興味深いのはニューヨーク市内に林立する外国人向けの英語（ESL）学校の授業です。米国に勉強にやってくる外国人は、正規の留学以外はまずはこうした学校から学生引き受けのビザ保証を受けねばなりません。語学留学生の出身地は日本や韓国をはじめ、東欧圏やアフリカ圏など多岐にわたるので宗教観や倫理観もそれぞれに違います。べつにカリキュラムで決まっているわけではないのですが、アメリカ式の生活実態に基

づいた英語教育というのでしょうか、90年代からはそこで性的少数者の話題が多く取り上げられています。

そこには実際にゲイやレズビアンが教えているからという事情もあるでしょう（そんなにゲイやレズビアンが多いのか、と驚く話ではありません。クローゼットである必要がないということです）。6月の最終日曜に五番街で大々的に繰り上げられるプライドパレードのことや日々のニュースで大きく報道される同性婚をめぐる議論、さらには LGBT の青少年に対するいじめ問題、と恰好の話題には事欠きません。

外国人学生たちは自国ではほとんど触れられないそうした話題をふられてたどたどしい英語でも自分の意見を述べるように促されます。そこに先生が NY の観点から具体的な生活に即した解説をします。なにせこの街で知り合ったばかりの友人たちを辿るだけでもすぐに LGBT の人たちに行きあうわけで、彼らにとってはそうした授業はとても NY らしい洗礼というわけです。もっとも、そういう場合に多く HIV の危険性にも触れられるというのも NY らしいといえば NY らしい。

よく、アメリカでは学校でコンドームを配るらしいと言われますが、そういうのはとても限られた例で、だからこそこちらでもニュースになったのです。性教育も基本的には性衝動に対する「自制」がテーマです。それで、それを基にそれ以上を教えるか、それともそれだけを教えるか、の違いです。2002 年の調査では、全米の中等学校の 34% が性教育に関しては「（結婚までの）自制」のみを教えており、58% が「自制」と「それ以上」の情報を教えていると答えています。

ただし、「自制」のみの性教育で実際の初体験を遅らせられるかどうかは定かではありません。2007 年に米国議会が行った調査では「自制」のみの性教育を受けた生徒たちと、そうではない生徒たちの間に性交の経験や避妊法の採用に関する比率の違いはありませんでした。（つづく）

「ありのままのわたしを生きる」ために



第23回

無謀な挑戦

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態の MtF トランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

1 月は、それまで見て見ぬふりをしてきたやっかいな仕事をしなくちゃならない時期です。もっと早くにやればよかったと、去年も思ったのになあ。

閑話休題。

玖伊屋の新聞記事との出会いで明けた 1999 年は、わたしにとっては「トランス前夜」と言える年でした。玖伊屋に参加することによってトランスジェンダーの仲間とはじめて出会い、全キリでカムアウトすることによってわたしを受け入れてくれる他者と出会った年でした。その一方で、YMCA へのカムアウトの失敗により、世間の冷たさを知った年でもありました。

ところで、当時のわたしは、ワイルド&ダーティーなイメージから中性的なイメージへと移行はしたものの、まだまだ「男性」の範疇にいたように思います。そして、玖伊屋や全キリなどに参加する限られた時のみ「女性モード」へと振る、いわゆるパートタイムのトランスジェンダーでした。しかし、元来、わたしには「モードの切り替え」ができるほどの器用さはありませんでした。また、片方のモードの時に、もう一方のわたしを隠し通せるほどの警戒心もありませんでした。さらに、パートタイムで我慢できるほどの忍耐強さがありませんでした。そしてなにより、玖伊屋や全キリでようやく出会えた「いつき」を日常と切り離したくはなかったのです。もしかしたらそこには、いままで出会ってきた本名で生きる在日の生徒や、自らの出身を明らかにして生きる部落の生徒の影響があったのかもしれません。そう考えるわたしにとって、「フルタイム」以外に選択肢はありませんでした。

翌 2000 年は、わたしにとって「フルタイム」へと移行をはじめた年でした。中性的な男性から女性へとトランスを進める第一歩をどこにおくか。当時のわたしがとりあえず選んだのはメイクでした。

その頃自動車通勤していたわたしは、ある日、職場に行く車の中で、意を決してメイクをしました。と言っても、メンズ用のファンデーションにチークを軽く、唇にはリップクリームを塗る程度の、とても中途

半端なものでした。当時、わたしは授業を持たない「加配教員」でしたが、その日はたまたま自習監督があったので、その姿のままで教室に行きました。当然、生徒たちは「なんでメイクしてるの?」と質問してきました。わたしは、「実は自分はトランスジェンダーで」と説明をしました。すると、生徒たちは「かわいいー」「オレンジのチークは、今、はやりやでー」などと言ってくれました。生徒たちの反応に安心したわたしは、それから数日、メイクをして出勤しました。生徒たちも同僚も、特になにも言わないので、きっとみんな受けとめてくれているとわたしは思いました。

そんなわたしの誤解を指摘したのは、かつて「なにがしたいんや!」と一喝した先輩でした。「誰も何も言わないのは、みんな何を言っているかわからなくて困っているからや。誰も認めてなんていいひん」。そのひとは、わたしに現実を直視させるものでした。

考えてみると、はじめにカムアウトした生徒たちとは日常のつきあいがあるわけではありませんでした。そんな生徒たちに何を言っても、結局は「届かないカムアウト」でしかなかったのでしょう。それは、同僚も同じことでした。当時のわたしは、変化していくわたしへのとまどいを隠せない同僚としゃべるのがしんどくて、ほとんど誰とも口をきかず、ひたすらパソコンに向かって仕事をしていました。そんなわたしのメイクによるカムアウトは同僚たちに届くはずもなかったのです。その時のわたしは清水の舞台から飛び降りるような思いで「フルタイム」への一步を踏み出したつもりでした。しかし、それはなんのサポートもないままにおこなった、無謀な挑戦でしかなかったのです。

「女性はメイクしても何も言われないのに、なぜわたしはダメなんだ」と思いはしたものの、それが通るわけではありません。一步を踏み出そうとしたわたしは、結局その一步を引っ込めることにしました。

職場でのフルタイムは断念したわたしでしたが、一方、職場の外の居場所は、この頃から少しずつ広がりはじめました。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

希少価値がなくなったのか?!

性教育の媒体で明言するのは少々はばかれるが、性は経済的な価値と結びついている。売春がもっとも古い職業だった、という俗説が正しいかどうかは知らないが、むかしから、女性は性的価値が高ければ有利な結婚をすることができ、経済的・政治的に勝ち組となった男性は、美女を娶ろうとした。そうした傾向は21世紀の今日でもあまり変わらず、お見合いサイトなどでも、人気のある女性は（一般的な意味での）美貌に恵まれたタイプで、男性は外見に多少難点があっても、こと結婚となると経済力がものを言わせる。

けれども、これまで、若い世代の女性の場合、容貌のいかんによらず、相対的に性愛関係では優位な立場を取ることができた。それを可能にしたのは、まさに「市場」における需要と供給のバランスで、総じて男性の性的欲求のほうが過剰で、なおかつ倫理的にセックスへのアクセスが制限されることによって、二十代くらいまでの女性は性的な選択権を手にすることができた。

しかしながら、そうした性のマーケットの状況にも変化が訪れている、というのが本書『デフレ化するセックス』のレポートするところである。著者の中村淳彦氏はAV女優などの取材をしてきたフリーライターで、風俗業界にも詳しい。彼によると、以前なら、経済的に困窮したら性産業で働けばなんとかなる、という見方が女性のなかにあったが、現在ではたとえ風俗で仕事を得られたとしても、労働条件のわりにはそれほど稼ぎにはならないという実態がある。

例えば、ピンサロというのは、「接客役の女性従業員が客の性器をおしぼりで拭き、フェラチオのみで射精に導く風俗店」だが、著者の取材によると、そこで働くある女性はフルタイム13時間の労働で24人の



デフレ化するセックス

中村淳彦著
宝島社新書
780円（税込み）

客を相手にしたとしても、諸経費を引いた取り分は日給3万3200円にしかない！これを1日、3万以上も稼げると思うか、重労働の割に安いと考えるかは人によるのかもしれない。が、こうした職業とて、採用されるときにはその容姿が重要になってくる。つまり、風俗業にしても、いまや、女性なら誰でも就けるわけではない。

ましてや疑似アイドルとも言えるAV女優ともなると、「100人の応募があったとして面接をするのは30名、そのうち企画単体での採用は3.75名…70名は写真を見ただけで書類落ち」だという。むかしなら、そうした媒体に出演しようという女性自体、滅多なことではいなかったが、いまや応募には一般女性が大半押し掛け、さしたる収入にもならないのに、堂々と顔とからだを晒して金を稼ごうという時代になったのである。

中村氏は、そうした変化をこのように分析する。「雇用が厳しくなって収入が伸び悩み、結婚というシステムが大多数のもでなくなり、加えて結婚という目的がなくなったために女性の性倫理も崩れてきている。(略)そのような状況下で副業を考えたとき、現在はインターネットサイトへのアクセス一つで、様々な情報を入手することができる」ことで、セックスはデフレ化している、と。

デフレ化というとなにか悪いことばかりのようにも思えるが、これは、セックスが解放され自由になったということでもある。婚外セックスがカジュアルなものになり、セックスそのものの市場価値が下落してきたがゆえに、風俗などでの相手にもそれなりのクオリティを求めるようになったという面。売買春の是非とは別に、それが60年代からはじまったセックス革命、性の自己決定の延長線上にあることも間違いのない。その自由に品格があるかどうかはともかくとして、だ。

(作家 伏見憲明)

▶▶ 東京性教育研修セミナー 2013 ◀◀

～若者の性行動は今後どう変化していくのか？～

3月20日（水・祭日）13:00～17:10（受付12:30）

青少年の性行動の日常化と分極化

～「第7回青少年の性行動全国調査」からみえてくるもの～

日本性教育協会（JASE）では、1974年よりほぼ6年おきに全国の青少年の性行動・性意識について調査してきた。今回は2011年に行われた第7回調査の分析をもとに、青少年の性行動と性意識の現状を報告する。そのなかで、この37年間における青少年の生活環境の変化と性行動の変容との関連、また情報化社会のなかで青少年のメディア利用と性行動との関連を探る。さらに、性関係のあり方と性意識との関連、性的被害や性教育と性意識・情報が青少年にどのように受けとめられているかについて検討を行う。

内 容 講演「性行動調査の意義と今後の課題」片瀬一男（東北学院大学）、「欲望の時代からリスクの時代へ～性の自己決定をめぐるパラドクス」高橋征仁（山口大学）、「青少年の家庭環境と性行動」石川由香里（活水女子大学）、「消極化する高校生・大学生の性行動と結婚意識」渡邊裕子（駿河台大学）、「性教育・性情報源と性知識」中澤智恵（東京学芸大学）、ディスカッション・Q & A「若者の性行動は今後どう変化していくのか？」。

会 場 文京シビックセンター 26階スカイホール（東京都文京区春日1-16-21）
東京メトロ「後楽園」駅徒歩1分、都営地下鉄「春日」駅徒歩1分、JR総武線「水道橋」駅徒歩9分

参加費・問合せ先等

主 催 日本性教育協会・「第7回青少年の性行動全国調査」調査委員会。

参加費 1,000円（当日受付でお支払いください。資料代含む）。**定員** 90名（先着順・予約制）。

申込方法 「氏名、住所、電話番号、メールアドレス、所属、職業」を明記して、FAXまたはメールでお申し込みください。折り返し、地図の入った参加票をお送りします。JASEホームページの応募フォームからお申し込みいただけます。

<http://www.jase.faje.or.jp/support/jasstokyo.html>

問合せ先 〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビルB1 財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会事務局
E-mail: info_jase@faje.or.jp FAX: 03-5800-0478 〈お問い合わせ電話〉03-6801-9307

▶▶ **3月1日（金）17:45～20:00 / 2日（土）9:00～17:00** ◀◀

性教育研究会 第3回学術大会

内 容 **1日目：基調講演**「性被害と子どものトラウマ」奥山眞紀子（国立成育医療研究センター）

2日目：基調講演「思春期児童への性教育実践」岩室紳也（ヘルスプロモーション研究センター）、**分科会**（A）児童相談所・児童養護施設、（B）児童自立支援施設、（C）事例検討、（D）矯正施設（少年院）、（E）医療、**性教育実践講座**（A）「児童福祉施設における性教育実践」コーディネーター：山口修平（児童養護施設一宮学園）、（B）「思春期における性教育実践」足立泰代（性教育ファシリテーター）、（C）「性を知ろう」堀口貞夫（産婦人科医）、（D）「デートDV」西山さつき（NPO法人レジリエンス）、（E）「子どもを取り巻く性情報とその対策」渡辺真由子（メディアジャーナリスト）、ほか。

会 場 国立オリンピック記念青少年総合センター・センター棟417号室他（東京都渋谷区代々木神園町3-1）
（TEL 03-3469-2525 場所の問い合わせのみ）

参加費・申し込み及び問い合わせ 参加費／2日間参加：一般／8,000円、学生／5,000円、1日のみ参加：一般／6,000円、学生／3,000円。
申し込み・問合せ先／〒260-0822 千葉市中央区蘇我1-4-9 プラシス105 性教育研究会事務局 石澤方英 TEL 090-1429-6958（担当：石澤） E-mail seikyoiiku.taikai@gmail.com